

玉城 英彦著 世界へ翔ぶ —国連機関をめざすあなたへ—

国立病院機構沖縄病院 石川 清司



「恋島への手紙—古宇利島の思い出を辿って」(新星出版、2007年)に続く著者の足跡である。彼は世界保健機構のエイズ戦略に参画した。15年間にわたる地球規模での活動の舞台があった。何が、彼をしてそこまで駆り立てたのかに興味を覚える。

彼の出身地「古宇利島」は、沖縄本島北部、羽地内海に浮かぶ小島である。空の青、そして海の青。水平線は越えるべき存在以外の何者でもなかった。島でランプの生活を体験した最後の世代である。

素朴なランプのほのぼのとした灯りは、檜舞台のまばゆいほどの照明の中においても、「一隅を照らす」ことの大切さを記憶に留めていた。「エイズ」を含めて、病気はややもすると社会的弱者を襲う。かつての結核がそうであったように衛生環境、経済格差は病気の悲惨さを助長する。文章の合間に、救いを求める人々に対して手をさしのべる勇気と正義感を垣間見ることができる。

沖縄の「なんくる」の精神は貴重である。著者が「翔べ」とけしかける背景には、「なんくる」の本来の意味が隠されていた。先人の教え、「まくとう(誠実に)そうれ(生きていたら)」・・・「なんくるないさ(道は開ける)」である。この南国的楽観主義は、果敢に挑戦する心を育てていた。願わくは飛ぶ前に、確固とした専門性を背負い、語学を踏み台にして跳ぶのが着実な道程である。しかし、語学は有効な手段ではあるが、必ずしも語学が全てではないと彼は説く。

宇宙から地球の美しさを知るのと同様に、国連機関での活動の中から日本の良さを学ぶ。正確な航海を続けるには、一步も二歩も距離を置いた世界から、自らを見つめ直すことも大切な視点なのであろう。若い世代が、世界を駆け巡る活動をとうして、国の、政治の、そして自

らの航海の目的を明らかにしていくことの大切さを強調する。

北海道大学で教鞭をとる著者と私の接点は名護高校時代にある。当時の名護の町には、名護の七曲がりから屋部村につながる長い砂浜が存在した。名護城(ナングスク)からの眺望、白い砂浜、名護湾、夕日の沈む水平線。自然は夢を膨らませた。この素朴な自然の背景が、彼をして地球規模の活動の場に押し出したものと考えたい。夢を喰うことを忘れかけた現代の若者に一読を勧めたい。

古宇利島を小舟で渡った。真っ赤な血で染まったイルカ狩りの名護湾を臨んで高校生活があった。彼はテニス部に属し、私は新聞部であった。血気盛んな連中が多く、生徒会の会長選挙等は燃えに燃えた。そして沖縄を脱出、東京でのカルチャーショック。異文化に多少面食らったが、かえってそれらをバネにして日本を脱出し、渡米。努力、忍耐等の用語を用いることなく、さらりと激戦の地を駆けめぐった足跡が綴られている。

WHOでの活躍の舞台からの帰途は、沖縄の地ではなかった。さらなる挑戦の旅が続く。現在の彼の肩書きは、北海道大学大学院医学研究科(国際保健学分野)教授である。さらなる活躍を期待するとともに、若い世代にこの本を推薦する。



玉城 英彦著 世界へ翔ぶ
—国連機関をめざすあなたへ—(彩流社)